

水田・里山放牧ニュースレター 第 9 号



イタリアライグラスへのスリップ放牧（島根県）

2005年 1月 19日

発行 水田・里山放牧推進協議会
事務局 畜産草地研究所（那須）

〒329-2793 栃木県那須塩原市千本松 768

TEL 0287-37-7003 FAX 0287-37-7132

第 6 回情報交換会開催される

歳も押し迫った 12 月 22 日、水田・里山放牧推進協議会第 6 回情報交換会が畜産草地研究所（那須）で約 50 名の参加者で開催されました。今回は放牧を始めている農家の皆さんにお話しいただき、実際の技術情報交換を行いました。

佐藤重利さん（島根県太田市、繁殖和牛4頭、放牧経験7年）

放牧を始める際の留意事項として、「放牧地は牛にとって快適な場所に」、「牛の挙動を十分観察し、牛の身になって管理」、「仲間づくりと家族の協力」が重要なこと、さらに子牛の馴致方法についてわかりやすくスライドを使って説明されました。佐藤さんのお話については、ニュースレターに連載してご紹介する予定です。

相馬和至さん（栃木県那須町、繁殖和牛16頭、放牧経験3年）

妊娠確認した親牛を分娩 2 カ月前まで放牧しています。水田裏放牧は 50a で、秋に稲の収穫 10 日ほど前にイタリアンライグラスを播種して、翌春放牧するというやり方です。牛の糞の肥料分があるので稲の元肥は通常の半分くらいにします。草地放牧はやはり 50a くらいですが、ペレニアルライグラスを使っています。シバ状になり、あまり草丈は高くないけれど牛は結構十分食べているようです。堆肥や施肥は他の牧草より多く要るようです。耕作放棄水田は近所の耕作放棄水田があり、草ぼうぼうになり、害虫の発生源になって困っていたところに放牧させてもらいました。ヨモギがぼうぼうの状態だったのが、牛を入れて 1 カ月くらい経つと驚くほどきれいになった。野火焼きの手間も省けるし、近所にも喜ばれています。

人見武平さん（栃木県黒磯市、繁殖和牛17頭、放牧1年目）

放牧を始めるに当たって心配したことは飼料が足りなくなるのではないかとということです。これまではイタリアンとデントコーンとの組み合わせで 1 頭あたり約 15a あれば良かったのですが、放牧の場合、1 頭あたり 30a 位必要になり、しかも 10 月一杯くらいまでしか放牧できません。しかし年もとったし、こういうやり方も良いかと思っています。良い点としては、もちろん省力もありますが、放牧地での牛の水やりと見まわりを孫にやらせて、孫が牛に接するようになったことです。シロクローバが多くなりすぎたことが困った点です。夏場、アブ・ハエを追い払うのにスプレーをかけてやると、行けば寄ってくるようになります。通る人が車を止めて見てくれたり、近所の評判は良いし糞尿処理の面でも大変良いことです。

相馬光美さん（那須農業振興事務所経営普及部、那須での放牧普及に中心的役割）

那須地域では繁殖和牛飼養農家の高齢化が進み、後継者もなく、牛飼いをやめる農家も出てきているので省力化をねらって放牧の導入を図りました。低コストな牧柵の工夫、試験的導入、研究会の組織化などを行っています。導入するまでは、牛の馴致、捕獲、ハエや臭いの問題を心配しましたが、それぞれみんな工夫して解決しています。今後は、地域の耕作放棄地の放牧による有効活用を図り、良好な農村景観をつくる、ゆとりある楽しい和牛経営づくり、さらに関係機関と協力して放牧を進め、和牛の増頭を図ることを考えています。

富山県立山町における水田放牧の取り組み

富山県農業改良普及センター 園芸畜産課
佐丸郁雄

(1) 取り組みの概要

富山県立山町は、常願寺川扇状地と弥陀ヶ原・立山・後立山連峰の間に位置し、立山黒部アルペンルート観光の玄関口として豊かな自然と農村地帯が広がっています。また、昔から繁殖・肥育和牛の飼育が盛んであり、県内では立山牛の名前で親しまれてきました。

しかし、立山町横江地区では、近年、農業者の高齢化等から休耕田が増加し、長年の不作付けにより、カヤなどが優占するとともに低木が入り込むなど、荒廃が進行していました。また、町内の和牛繁殖農家も牛肉自由化などにより、一層の低コスト化と労働力の軽減が必要となっていました。(写真1)



このため、農村の景観保全と畜産の省力低コスト化の観点からも未利用圃場に生育するカヤなどを草資源として有効に活用するための手法が模索される(写真1)放牧前の横江地区(H14)中で、平成14年に初めて、町、普及センター、家畜保健衛生所など関係者が仲介し、地元耕種農家と町内肉用牛農家の話し合いがなされました。当初、県内では他に水田での放牧事例がまったく無く、地元耕種農家の不安が大きかったため、関係者が他県の事例や放牧方法等を示して説明し、放牧を了解してもらうよう説得を行いました。

その結果、平成14年の秋に、試験的な取り組みとして、不耕作地約1haの圃場周囲に牧柵(有刺鉄線と電気牧柵の二重張り)を設置するとともに、給水設備等を設け、繁殖和牛3頭の放牧を実施しました。放牧した牛は、町の牧場で放牧経験のある妊娠中の繁殖和牛で、事前にピロラズマやO-157等について県家畜保健衛生所が衛生検査を行い健康状態が良好であることを確認しました。

牛は放牧後、電気牧柵にすぐ馴れ、当初心配した脱柵等の事故はありませんでした。また、健康状態は終始良好でした。給与飼料は自生のカヤや下草の採食で充分であり、フスマ等の補助飼料の給与はほとんど必要ありませんでした。日常管理は、立山町肉用牛農家5名で構成する立山放牧組合が行い、給水状況や牛の健康状況を確認することが主体でした。

下牧時には、カヤの葉や雑草がほぼ食べ尽くされ、踏圧により株が小さくなるなど景観の改善にも大きな効果がありました。なお、畜産環境汚染の問題も発生しませんでした。また、副次的な効果として、放牧後周辺の野猿の姿が見えなくなったことから、獣害対策としての効果も期待できました。



問題点としては有刺鉄線の設置に労力を要したこと、蹄圧により畦畔の一部が崩壊したことなどが挙げられますが、全体としての感触は概ね良好でした。平成14年度は、試験的な実施であり(写真2)転作田での放牧(H15野村地区)脱柵防止のため有刺鉄線と電気牧柵(三段)の二重張りとしましたが、通常は電気牧柵だけで放牧可能であり、1haの面積であれば柵の設置に2~3人で約半日、施設コストも30万円程度と、労力及び経費面からも、十分普及可能な技術であることが実証されました。

このため平成 15 年度は、5 月中旬から、同地区で面積を 4ha に拡大するとともに、立山町野村地区の転作田において電気牧柵のみによる放牧実証を行いました。(写真 2)

更に平成 16 年度には、従来の地区の面積拡大に加え、新たに立山町目桑地区で耕種農家が中心となった放牧にも取り組みました。これにより、水田放牧の全面積は 8ha となりました。

また、立山町以外にも当技術が波及し、氷見市において耕種農家が水田放牧に取り組み、新規畜産農家が誕生しました。

なお、3 年間放牧を継続した横江地区においては、カヤ株等のほとんどが消滅し、荒廃地が農地として再利用できる程の状態までに復元されました。(写真 3、4)



(写真 3) 放牧中の横江地区 (H16)



(写真 4) 放牧後の横江地区 (H16)

(2) 今後の展開

耕作放棄地は雑草種子や病虫害の温床となり、それ自体が景観を損ねる原因となります。しかも、更に大きな社会的影響としては、農家の農業生産に対する活気が無くなり集落機能が停滞することが上げられます。畜産サイドでも高齢化や環境問題などにより経営の縮小や中止が表面化しています。それらの問題点を解消する対策の一つとして、荒廃水田を活用した小規模放牧の活用を推進するとともに、地域水田農業ビジョンに水田放牧を位置付け農地を有効に活用することにより、県内和牛繁殖基盤を拡大していきたいと考えています。

また、最近では、子供たちが牛(特に和牛)を見る機会はほとんどないため、町内外から、子供連れが牛を見るため多数訪れました。このため、今後は、子供達に放牧されている牛を観察させたり、地場産の牛肉を食べさせるなど、命と食のかかわりを気づかせるような体験を与える場所を提供していくことも重要と考えられます。

今後、本県において水田等における放牧を推進していくためには、放牧実証事例を増やし耕種農家の放牧に対する偏見を軽減するとともに、安心して放牧を実施できるような体制や指針作りが必要です。更に、放牧面積を拡大していくためには、放牧可能な繁殖和牛と管理者の確保も重要です。

いずれにしても、景観維持、労力やコスト、生き甲斐対策など種々の要因を総合的に検討しながら、この技術を積極的に取り入れていきたいと考えています。

第7回情報交換会のお知らせ!

日時：平成 17 年 3 月 18 日(金)14:00-16:30

場所：畜産草地研究所(那須)GG ホール

内容：

講演「これからの肉用牛情勢と和牛繁殖経営の課題と展望(仮題)」

麻布大学 名誉教授 栗原幸一氏

各地・各分野からの情勢報告

第 6 回情報交換会参加者からの報告

[大子町小室さん、大藤さん]

6 名で「簡易放牧会」を結成し、放牧を開始したが、現在、10 名に増えた。また、山林の中に放牧を始めようとする人もでてきている。裏山の山林を間伐し、放牧地を作り、草地ができあがるまで、2 頭程度の放牧を行う計画がある。

私の放牧は、荒廃した畑・水田計 30 a でスタートした。その間に小川があり、そこへ橋を架けるとともに、小さな牧区を作った。さらに、今年、15 a の放牧地を作り、その一画に電牧で囲ったパドックを設け、簡単なスタンションを設置した。また、周りにトラックが通れるよう簡易道を作り、1 日に 2 回は餌をやるようにしている。その結果、そこへ行けば、牛が必ず集まるようになった。町でも高齢者対策・増頭対策の一環として放牧を推進。

[那須農振事務所]

高齢者が多くなり、牛飼いをやめる人が増えてきた。手間を省いて簡単に牛を管理できれば歯止めがかかり、増頭も期待できることから放牧を推進している。

[岩手農研センター]

一昨日、放牧を終了したばかりですが、毎年、放牧しており、牛が慣れているため、牛の捕獲・移動には苦労していない。草種・草生も脱柵要因となるが、時々、笹・野草を食べさせるなど工夫している。また、頭数も多いこともあり、仲間に入れない牛が時々脱柵することがある。試験場でも、より効率の良い放牧を行うため、管理方法を検討している。

[千葉県農畜産課]

現在、放牧は全く実施されていないが、今後普及させるための準備として、本日出席させていただいた。阿波郡で耕作放棄地放牧を計画している。

[長野県農政部畜産課]

15 年度から 2 カ所のモデル地区を選び、放牧を開始しているが、非常に好評で、今年度はさらに 8 カ所に増やした。いずれも「導入して良かった」と喜ばれている。耕種農家が主体で、放牧を導入した事例では、これまで牛の飼育経験が全くないにも関わらず、当番で管理に当たっているが、これまでのところ支障はみられない。放牧は特定地域に集中せず、全県に散らばっているが、これを機にさらに広がるのが予想される。

未経験牛を初めて放した時、ほとんどの牛が脱柵したが、それ以降の報告事例はない。導入段階で十分な対策があれば問題がないと考えている。

[関東農政局]

1 月 12 日に「耕作放棄地の放牧利用に関する研修会」を開催する。これと併せて肉用牛（特に繁殖牛）の増頭協議会を立ち上げ、肉用牛の増頭に向けて行政、生産者が一体になって取り組みを進めることを計画している。

[東海農政局]

放牧の事例はまだほとんど無いが、関心があり、勉強している段階。

水田・里山放牧推進協議会のホームページからこれまでのニュースレターを見ることができます。メーリングリストもできましたので参加して下さい。

ホームページのアドレス：<http://houboku.ac.affrc.go.jp/>

メーリングリストへの参加方法：kiyosi@affrc.go.jp 岡田までメールをお送り下さい。

連絡先：栃木県那須郡西那須野町千本松 768 畜産草地研究所 研究交流調整官

Fax 0287-37-7132 e-mail:kouryu_nasu@naro.affrc.go.jp

ニュースレターの内容を転載する場合は事務局の許可を得て下さい。